

荒木寿友、藤澤文 編著

『道徳教育はこうすれば  
〈もっと〉おもしろい  
未来を拓く教育学と心理学の  
コラボレーション』

北大路書房、2019 年

267 頁、2,600 円（税別）

本書は、「道徳の時間」が「特別の教科 道徳」（道徳科）となった小学校や中学校の教員を主な対象としている。特別教科化により道徳科の授業づくりに焦点が集まりがちであるが、道徳教育とは何か、そもそも我々人間はどのような存在で、これからの道徳教育は何を目指すべきなのか、じっくりと考える手がかりとなる書籍である。

編著者の荒木寿友氏と藤澤文氏は、本書のタイトルにも書かれているように、前者は教育学を、後者は心理学をそれぞれ専門にしている。荒木氏が第1部の「道徳を学校教育の観点から捉える」の編集を、藤澤氏が第2部の「道徳教育を心理学の観点から考える」の編集を担当している。そして、各部とも多くの研究者によって最先端の研究成果が紹介されている。また、第3部「学習指導案を創る」では、道徳科の授業をどのように展開していくのかについて、全国の実践家による具体的な取組が多数掲載されている。

このように、編著者の御二方が、自由な発想で、様々な研究者や実践家を巻き込み、各々の専門分野からこれからの道徳教育について論を展開しているのが本書の特徴と言える。

荒木氏は本書について、道徳性発達研究会（現日本道徳性発達実践学会）が研究してきたコールバーグ理論やモラルジレンマ授業について紹介する『道徳教育はこうすればおもしろい』（1988年）、『続 道徳教育はこうすればおもしろい』（1997年）の2冊の続編にあたるものであると序文において説明している。しかし、コールバーグ理論にとらわれることなく、新しい道徳教育の在り方を様々な角度から切り込んでいくことで、多様な読者が「おもしろい」と知的好奇心を喚起することを目指したと続けている。この思いが、タイトル中の〈もっと〉という言葉で表現されているのである。

このことを表すように、第3部で紹介されている15の実践例の内、コールバーグ理論に基づくモラルジレンマ授業は6例であるが、残りの9例は、問題解決的な学習や、教材文に「エピソードファイル」を加えて人物の生き方について多面的に考える学習、「哲学対話」を通して自分の考えや自明を問い直し、異なる考え方や感じ方に接しながら多面的・多角的に探究する学習、演劇的手法を通して体験的に理解を深める学習、「知の理論」

（TOK：Theory of Knowledge）に基づく知の探究的な学習等、多様な授業が提案されている。中には、SNSのトラブルを防止するための標語を作るといった実践も紹介されている。

第1部の教育学と第2部の心理学の理論研究のコラボレーションに加え、第3部の実践例の紹介、まさに、道徳教育を大人にとっても子どもにとっても〈もっと〉おもしろいものにするための手がかりとなる1冊であると言えるだろう。

谷口雄一（摂南大学）